

祖父恩

鐵錚鑄

乾

~5
1267
1

4

35

30

25

20

5



大
丈
丈
丈



丈
丈
丈
丈



隋景仁八歲而入屬文十三四歲
徧讀諸史至世尾上梅章十歲而能
孤詠三十歲而能成文祖父の大役
時人咸謂再生蕭家瑞也年二十
名を繼へ三十歳で驛使才子と
と茲梅壽佛乃冷暖忌り多めの間へ
拂拂の如風一里代興（一）此間と見
ず而四方が風の通りにさかねばから不得て

主内をあらゆせをかと集の故を渡るその
度を嘗むと嘗まし薦められたりとまくへ
を（主内は嘗めの内にひよけられたり
かねば人よりあらゆ何事もやうせん朝の
薦められたり

（主内は嘗めの内にひよけられたり
かねば人よりあらゆ何事もやうせん朝の
薦められたり）主内もあらゆた

ひいりやうもんやうこみ
母田を施 孝經思量のゆくつ
做へし乾坤 丹誠かちと向うに
追慕り意を表ス余深感其意為供養

三善香草の筆

晋山都

其角

堂主

羽

為梅壽居士菩提授與外孫寺嶋清

高野山金剛峯寺法統權大教正前長者快猛

嘉永二年己酉閏四月廿四日寂

榮松院釋菊芳梅觀居士

行年六十六

葬遠州掛川驛廣樂寺

追福壽仙

祖父の恩下菊乃匂ひゆ
大ひういきく身のれ歎
初艸外江入の寛とて
といくなうと家事し
梨子棚がのゑひあ蘆
わいとし水瓶
りぬの破とて此處
らる葉代りそとは

永機 梅草 春湖 挑
章於師



湖於章於湖於章於湖於章於湖於
郭弓樹聲時啼聲
日之氣蒸暑
箱棟町の久の檀所す
齒及ては山の廣う亂
才乃よく峰へ中し只ひく
持口口けと狼を呼て水
争ふて枕かむつも堤
ゆるくまめ跡へひとつ

十
才替て夏は色の竹簾の子
白眼え耶の役へ誰、つる
早道のめぐつ事、は役よと
ひきつきわき雪の権は原
こねれ馳走のやうに達、
役せとれ代役やう袖
よみ賣ふじとて、
間の役すとれ小塚原
引越して、
常ハ鈍すとての樂師

左品のが店を月よ
ほうせきの店
川遠き里の山の秋寂し
里五すこあり
川遠き里の山の秋寂し
語りの心
ふい雨練の雨
心歌き花の忌日
心歌き花の忌日
やうい萬の春の歌

湖章 河章 指章

यांचित्यापि सतं प्रयिस्ता वरका

साचामयिच्छति जवं सजबे उद्यसन्तः

आस्य कृतं च परितुष्टि काचदस्या

धक्कां च तं च मक्नं च इमां च मां च

रामार्चार्द
イ・ヤム・チ・ン・タ・ヤー・ミ・サ・タ・ム・マ・イ・サ・

讀音
キニヤ・ミツ・チエテ・ギヤナム・サア・キ
子エ・アンニヤ・サクタハ・アスマット・クルテ
エテ・バリツ・シャテ・カーチ・ダンニヤ・デク
タムチャ・ダナムチャ・イマンチャ・マーチャ

印度人蘭昌德拉者自云世尊同鄉
古文書世尊棄世之詩寺鳴潔氏
以今茲當其亡祖父尾上菊五郎三十
三四忌乞予一言予則複寫以與之
如其讀音則以邦字記之恐失其
真也

明治十四年五月下濟梁川居士

追遠

楓の日斜もも葉へく墓の色
花咲し里れのみよ心と草

芝翫
露仙

仰て朝の羅漢耶　一茶堂
夜もさむやトアリハ　その雨
と詠つとも亦晴する新茶や
と宵燈の茶やむ　焼酎火
いきひしてそや扇の革のひ

延朴
か榎
孙若
棋園
相助

瑞翁なり　八角の三脚や
青梅やさにわすけのもうの香
芽より亦殊すがや　古柏
幽冥のち似あひ　唐せ唐は
植付　古根又残瓦　と毛竹

麦外
秀雀
高瀧
竹松

社若
三井
是好

とくつゝ會禊ひす流拂
柳の風す移と清蓮のむ
引と出で啼音ひゆて聲引
一筋の通きよるの夏四ふ
忍耐や艸をちうの初音
青梅り供物の聲すゑ柳
伸み月の花也え柳
あゆみ清しすきは柳
竹助新助
弓萬

燒香すねひよき扇うめ
や堂す幕拂す櫻のむ

斧九
斧九
斧九

菩提樹の根を啼ほがれ
經寫すれりしめる雨良
子ひひかよ書の舟の蒲のむ

寺詔す御十日や松ちじ
遠て國新す扇の音羽山

年月す夏まのひ御す
郭の声す川のなづつ

牛乳
金喫
金喫
繁昌
章治
章治
篠田
梅表
金治
能進

東都水清川の葉の搖る

富や

豊州

萬葉の初夏うの代名題

花柳

壽輔

紫陽花の輪の紋ハアミ瓦
爪奏つぬき音やん片月雨

兼之助
多見藏

繪馬中にまくら歌の酒しも
娘百合のひだに向叶
早しサヌキとまきの唄
茂り河中の一爪や抱柏
唯すのまもと重(萬葉抄)

高賀
舞臺

歌山
三猿

秀鶴

形代て屋の匂ひ歌う事

鶴童

魂ハ西方の天ヲ祀
魄ハ東海の地ヲ止マシ

梅畠居士の追善記

猫石也形^{シテ}三十日忌
ノミヒナ^{シテ}御^シ五十日忌

河^内其水

驚破江南夢一場醒
來無處不春光可憐
水月隴明夜踰影橫
斜送暗香

詠梅

確堂叟



山林集

確鑿

うきはぐく

あくすく まこと

わくわく

みゆきとあむ
うへるねん



水烟竹、布掌門風留
都過遠和宮羅新

詩見梅新一葉明月又

亨庚

於西堂齋作



抱雪懷冰四
十年

雲煙墨戲



夷山晚晴

日華

和言先生書

丁巳歲仲夏之



梅軒早春獨占花魁得陽氣之
最先者小陽春後至臘月開元宵
法多墨拙先泛幹枝玄女審
妙龍勁如鐵長如箭短如戟是用
工辨之者雙層圈注須圓大
圓口尖則類桃長則如杏貴含
不貴筋皮稀不宜無鄭錄花瓶總論

雲烟外史

劉

國

桃李莫相妨
夭夭之不同猶餘天

霑雪熊朱肩

十分紅

蘭疇

蘭疇

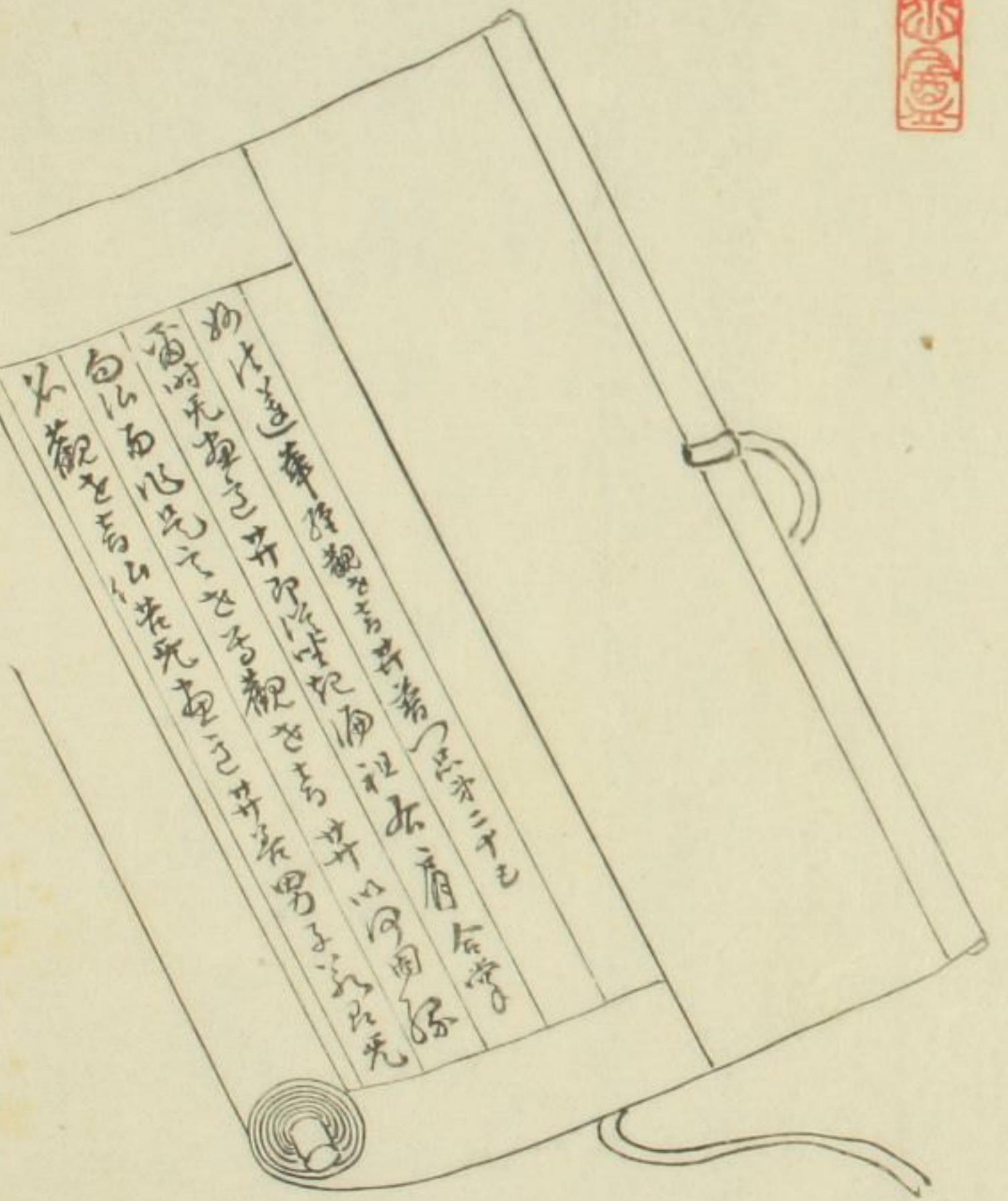
蘭疇

睿堯百卉媚不及
此幽芳

豫堂



幸山の梅幸年の
祖父の福、
色ある香様の幸も
見る幸の幸の幸
幸の幸の幸の幸



二二

明治十四年夏月

松梅草真福

有發也



追善門と前文略

梅の實の不思議生し哉も尔
芳一と圓居や夏の眞も何
手向もア十三間の郭ろ
夏涼一あきらめのゆうれき
え菊の肩やとむる眼のま
時ひ夏居も扇のあ向く
も外のつう陽と青葉

尋香
原洋
宇山
成雅
完鶴

早起すうちあゆう蓮の多
ミ計のものや蔓の土角は
杜能啼ひ歌ひ西の空
昏の名下呼聲りすのむ
活花の声下扇下
衣摘や三ツみのうすれ
うさき歌をの錦ひ麦鶴
歌ひ出下柄乃さうや夏室
三かけの色香をもく華柄
その折のをみ自して苦乃花

立平 素水 吳仙 精知
苗叟 花叟 摂菴

若芽かく柳やれの葉を下
達の音ひ曲くゆるよ花のを
訪すへゆくし 桜のを 月
大床ハヤシのりよ風涼
花の山を川 月の遠す
あやつてゆすもと杜若
根きちこ菊 昔やまめり

浪翁

房香

佛水
苗叟
不角
小窗
文周
徐本

竹窓の下野
むのと

朝暮のそよぐ聲に寺乃花

色をぬきりと草の名を叶

似観繪へゆひる日と夏さ

菩提樹とあそぶなまくらの実

竹窓
まつ

井資

施今

流矣

翁の斤隅とし青河
花咲く三十面の桜の苔

唐すゑて、この世をうめのむ

甫三

もの梅宿

仙翁

い豆

連水

うち此すの先音やとくに匂ふ墳
は消（柿）やとく向艸
とくれひよくらかよせばの主
やひわゆき董（董）の构

遠浦
西京
稻所
三の
竹茁
藍庭

主向

夏乃本と戸板（戸板）の曇（曇）
山を尾（尾）啼（啼）や阿多
東籠（籠）の松（松）（松）青河

横隕

富貴樓
川も
高田

麦赤きに山やま田の火ある

田ト麦也

車せ西院院佛を向の上までて

なよくもいのまほすあ

三行みりとるらしこの多

ニセ梅屋

ゆき河づ橋肩川夏木立
すす（花の行）よひ

古葉子悦

茶の色ト松毛ホア（風煙玉箭）

夏菊力照あひけぬちかヒ

八百善

三毛柏

笠の佐七尋まん宵祭

砂燕

犯けや松乃葉の御風波

高葵

花と香よ根株つる（菊も者

見連柳美

葉と香の未廣うさく及風波

住雲急

やひ出でよかや樹りてほと種

水魚連十足

紅の花舟の白雲か（外）

榮中

是ほの中一木ア神楊
白朮やうすに左き花の艷

一歩光賀

已とやかとと盛る菊の烟
粧そんじらを扇ひ一畠どう
空きうり引音ひ清めなる
梅のまやむの昔乃わいが
可居年叶し扇わる日や思ひあ
棋といふ字代はなとうの夏書け
虫河やかどりの董る菊小袖
蓮池わは琴の音乃みく聞
紫きやもよし歌 杜若

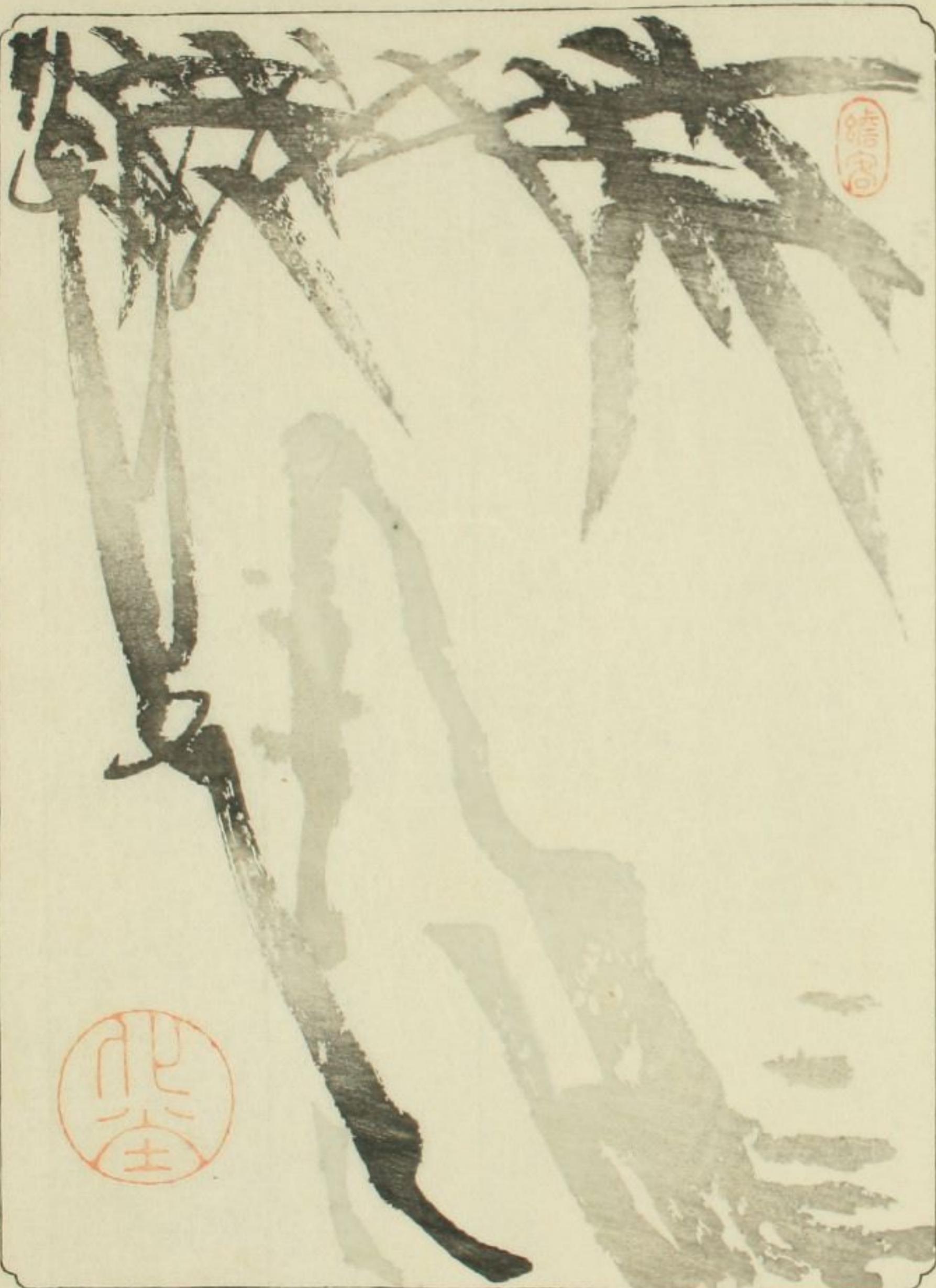
交東 種子
扇亭 梅知
綾賀 綾賀
大寺 蓝泉 哥布
希川 只誠 龍吟
本多鶴
二世

百葉とすすり挿り上にさう
土蜘蛛のそれ せばげこの涼
あゝうつ香ひとすすり菊のも
家のゐ董 さてみてと
さうりきその黄鼠や夏の荀
似し祝乃續ひしつれう
煙の絆くまゆす扇う耶
唐盆をとすあ風のかきうめ
一蓮のまう引ほう冰の上

裕呂 豫堂
三浦 指玉
孝郎 華谷
柳一 素直
貴子

短ねありぬ既矣
伽羅は木
夏すや心す水配り
よだ家ハシドモきゆは童る
白蓮や只す涼き歌の心
はりくぐゆ旅宿のり水
先實つてあらま。而雨のひ
玄葉のゑひくさきうりす
いづもむ露のひす夏の翁

櫛春
梧
菟好
桂月
桐
菊鳴
曳琴
松鳴





人致達生家
翁子有曾子
藝中大書

只在山

三兩石士



二
橋
見
女
錦
射

春
書

狂
一
曲
霓
裳

布
玉
鵠
江
都

風流才子有

誰才浦江梅郎

楊柳青女士



游子
芳嬌空寂寞
卅三圍
口口雲黑
勾搖脣粉人魚少
誰似吳娃做め教め

楊柳青女士



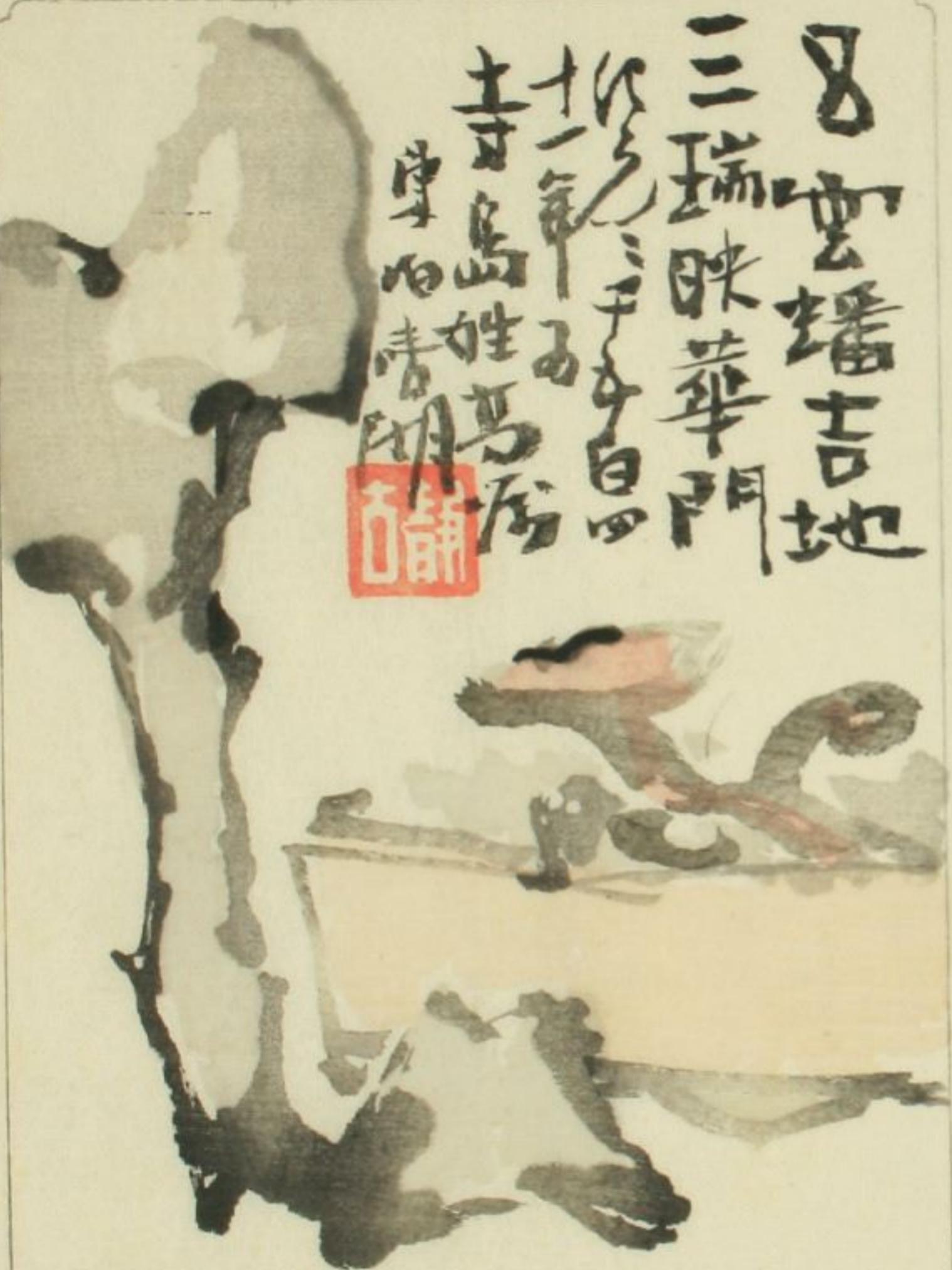
贊
志
傳
卷
世
津
日

楊少傳史



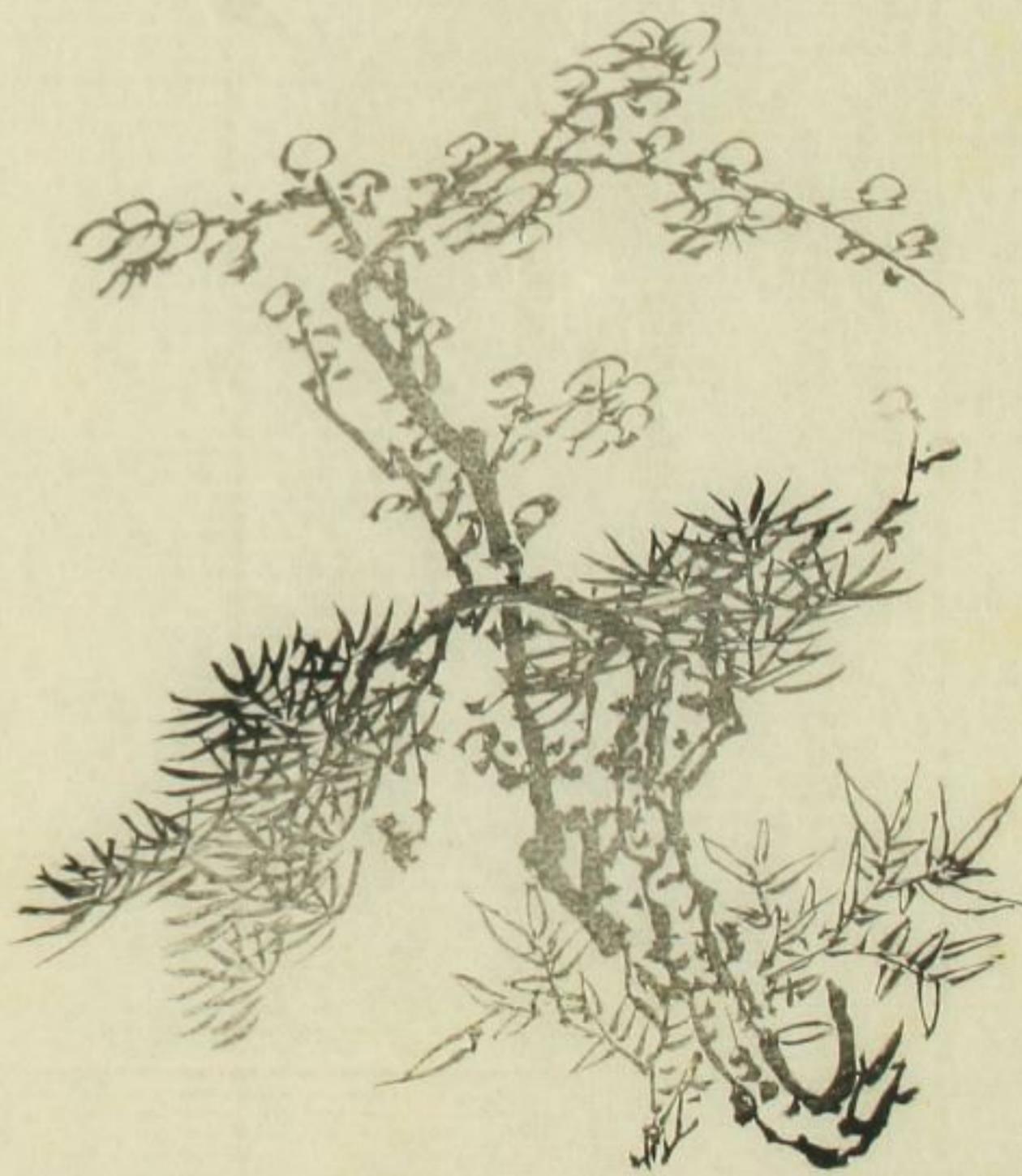
辛巳清和月、雨之宮於空同齋





歲寒三友

柳園



歲寒三友雅士寫

凌雲老人



岁寒三友



とま
黒豆を炒めねの後居
引くま

もんかくまとて
えの内お我



えの内お我

追善乳仙
風節ト涼 きららを扇ト
そあらまちを董る氣を
譲、藏東猿を建習し
耳ノはめ 厚ノ
書の字ノ和自ノ斤ノ
一ノうちノば。蔓喰
巨石

梅年 蓮舟 晋江 碧海 龍吟
巨石

ウ
荷のまゝ種を引まるひの稻

おもむきにむかひ居ゆ呂

塔の所のゆゑの方を厚厚くち

結つゆめハ何所こそ至ま

軒と泉梅屋町うらわあし

いのもの達つ邊つ丈る

翁入の朝月祝ふて見相

揚る新酒す狭き掩櫻

城下とむかへ小用のまき秋

声うけこやる千もの雨

櫻春

透

秋蠅

年

江

竹

月

櫻

雨

丹波りぬし草は透ふ

釣灯の氣り柔よ河くら

宿正衆とお茶の色し寝ぬ

黒の不神の皺うめく

御くもひ柳の若ひほふさう

風を中く醒井の歌

結物の後トとばやぢりぬし

のりと葉をせうりに

生醉仰さまの所へうきゆ

初雪はくす霜のなう

江州吟海江州年書

江竹吹物春
霞春石吹物春
草鞋くそりてか十年
ゆゑの原をきちりめくほよ
ぬま屋大工を職人ひき
居をうつ遠き昔のむとそ
母空みつゝてはせす

紫栗を湯漬の栗づき

ひえみ

アリ枝のばせ

祖父すしと羅漢うる新茶い

魯文

涼りぬ音羽の庵りみく
若されかしもやらき柏叶
阿くるしてせむれ柳の卯月はい
日のあしてちもよるのあらふ
棋のまさくわゆらむと移轉

棋壽翁の佑多のゆ

梅草石の莫さきすりやく

柳子
床室
毛喬
青城
竹深

其引

四五やハ河を廻ゆ竹

遼東

風ふくし初め雲や又山て
あまが山と成り更る
柏より抱ゆるやの木
波くと松の葉ゆ。是も不
えやこゑ啼をし。月
圓はまきの匂ひや梅の香

梶齋
梨塘
靜和
金羅
空狂
鶴丸

あがらの日すと寒山のあ

醉甫

素石

と角すと高音の向ひよ
朝公ありの所はあせり
まう者やあくまきの庭のもの
てゆばく啼やさりの川す
まゆくあやまき月夜
れ春よこゆかむよ松賣
れ葉と木のすて草なり爰

西京
芥舎
和琴を
徂康

肅所

半山

はこり空ひては 郷云
一月新茶うや 夏心
おもて椿を花の桺下
なまく雨つかる也 田川
動ひて宿の日も月

金田 喧
甲斐 謂 竹良
雪便 十湖

旅坐ちよどりまこと夜の里
けふとき夜半の名すく能
身のらて厚みあめえあ
あゆの中、紫や舟の舟

正義 春江
謝徳 金蘭

たもはる夏の葛のうじる
昔の人のよきれ

吉昌 正雄

紅丸の打と梅雨と忌月
はるかに脇の中の青
体と間と新とのじがふるわ
よしや竹とあいの旅處
水氣の峰と雲と剣山と
裸打とあいとあむかわ

子義 ふ及
山雀子 照弓
谷素朴

アラホの咲ひとれたる若狭の
山の音や間で放すはのうら
人氣りて田面の草の挿ゆ
矣りまへ源りせし啼桂

太年
出舟

晩香

三うる

白葉の上にさくらんの影
ひそむあそびの歌を歌ひ送
樂をよ國するくの音
紫陽花のさか色に天の向

岩井芳洲
東名
波声
波の聲
ばぬばぬ
波の聲
春支

笠の水首月三三と春の雪
花びらをもる日ひの夏水立
卯東のやう鶯うる小盆

花写

曙毛

林華

きく雄

氣のよりすこ目や拂扇
ニねゑつゝむ董や柏もち
墨のまにゑひ取つゝ扇ひ
夜とぞ宵々逃れやはる
けふりゆれ翁をつ社若
白雲のむづきをきめゆ

遠州
皮古
牛仙
う水
厂峰
毛雪
地坐

遠弓乃日支を
織羅のさむく

花々醉とし烟々目をのぞき提げ
察桂て涼ひよまやタヌキ、秀即
稚虫噢の苦恨つれそ白苏子、東阿
ひはうのせりあまみき五十弟
角啼や錦の、のう田川

古是佛
、吉朴
、香以

梅壽翁の本然清淨忌を祀る
楳章君て歌る

夏菊アモのモヒト讓あ

素引
笠阿弥

游遊朝。惡主
逐吹空多は哉
金絲出む揚
翠羽追

四角亭

辛巳初夏

演劇除帳

おまえ人

國内



梵音海潮音

揚彼世間音

汲とりまよ向ふ
あせよ御乃花

厚友 梅叟



為梅叟佛誕禱 大東行者蓮華叟書



甲

古の事より旅に果てりて身の難の
上の河阿風炮轟をききぬとて
涙をとも流石がれとて思絶ゆ
翁の識り葉光也祖父梅庵と
旅て跡をやる旅のうちかのと赴
三十八年の初り我いとす
耶とて聲へ御もなれど
はつと追善の禮をもくほどのり

徳島と身内をもせられと
賈ふるがた猶云外父の恩もま
深遠なるにハ夙もすく身ひどもれ
やと今又旅の身

四月廿日廣樂寺

五世 梅幸誠



明治十一年五月

以一編倣寶晉齋之筆意

其角堂書

東京赤坂 江川刀

